

研究論文

日本における寺院庭園の歴史と庭園観光

History of temple gardens and garden tourism in Japan

小野 健吉

Kenkichi Ono

和歌山大学観光学部教授

キーワード：庭園観光、宗教観光、浄土庭園、夢窓疎石、枯山水

Key Words : garden tourism, religious tourism, pure land garden, Soseki Muso, dry landscape garden

Abstract :

Temple gardens have played an important role for development of garden tourism in Japan since the 17th century. It is unique in the world. This paper first organizes historical events that represent the temple-garden relationship in Japan as follows:

- 1) A type of pure land garden built in the precinct of Amida-jodoin temple of Hokkeji grand temple in Nara in the 8th century was the first temple garden in Japan.
- 2) During the 9th-10th centuries, royal and aristocratic villas including their gardens in the suburbs of Kyoto were converted to temples.
- 3) Pure land garden style was established in the 11th century and many temples adopting this style had been built until the 14th century.
- 4) A group of monks called *Ishidate-so* were engaged in building gardens as specialists during the 12th-14th centuries.
- 5) In the 13th century, a garden located behind the temple building complex was introduced to Zen Buddhism temple.
- 6) A distinguished Zen monk Soseki Muso designed magnificent gardens such as those in Tenryuji temple and Saihoji temple in the 14th century.
- 7) Kitayama-dono villa and Higashiyama-dono villa which had beautiful gardens were built by Ashikaga shoguns, and they were soon converted to Kinkakuji temple and Ginkakuji temple respectively in the 14th-15th centuries.
- 8) A number of dry landscape gardens were built in Zen Buddhism temples mainly in Kyoto by Zen monks around the 16th century.
- 9) Many gardens were built in temples of any Buddhism sects in Kyoto, and the trend of garden-building in temples spread across the country in the Edo period (17th-19th centuries).

The paper then confirms the thriving of religious tourism in the Edo period. By consulting historical materials including *Miyako-meisho-zue*, a general guidebook of Kyoto published in 1780, and *Miyako-rinsen-meisho-zue*, a garden guidebook of Kyoto published in 1799, the paper argues that temple gardens were important tourist attractions in Kyoto and one of the main destinations for religious tourists.

The paper concludes that Japanese temple gardens had been developed in the long history of temple-garden relationship and they became tourist attractions during the Edo period. These facts represent the unique feature of Japanese garden tourism.

I. はじめに—研究の背景と目的

庭園観光とは、文字通り庭園を対象とする観光である。対象となる庭園がどのような施設に造営されたものかを考えると、日本では代表的な施設として宗教施設である仏教寺院

(以下、「寺院」という)が思い浮かぶ。現在の日本における庭園観光の対象となる庭園として、井原縁は「大名庭園」と「京都の庭園」を挙げている¹⁾。「大名庭園」は、江戸時代に封建領主たる大名の江戸屋敷および大名領国の城下あ

るいは周辺の別邸等に造営された回遊式庭園で、東京では小石川後樂園や六義園、各地の旧城下町では金沢の兼六園、高松の栗林公園、岡山の後樂園などが今も良好な状態で遺り、観光資源として多くの観光者が訪れているⁱⁱ。一方、「京都の庭園」の中心をなすのは、鹿苑寺（金閣寺）・慈照寺（銀閣寺）・龍安寺といった寺院の庭園であるⁱⁱⁱ。京都にも、江戸時代の桂離宮や二条城二之丸庭園、明治時代の無鄰菴庭園など、寺院に属するものではない優れた庭園もあるが、あくまでもその中心をなすのは寺院庭園と言ってよいだろう。なお、優れた寺院庭園がまとまってあるのが京都であることは確かであるが、寺院に庭園が営まれたのは京都だけというわけではない。

海外に目を向けると、庭園が観光対象として重要な位置を占める英国とイタリアをはじめ^{iv}、フランスやドイツ、スペインといった欧州諸国で観光資源となっている庭園は、王侯貴族あるいは富裕階層の邸宅に営まれた庭園^vであり、宗教施設であるキリスト教の教会でそれ自体が観光対象となる見事な庭園が営まれているといった事例はほとんどないと言ってよい。一方、東アジアに目を移すと、中国の著名な庭園として世界遺産リストにも載る蘇州園林、頤和園・避暑山荘の名が浮かぶ。蘇州園林は郷紳の邸宅に営まれた庭園群であり、後者の二庭園は清朝の離宮庭園である。韓国においても、新羅時代にさかのぼる雁鴨池は東宮（皇太子宮殿）の庭園、李氏朝鮮時代の昌徳宮庭園は王宮に伴う庭園であり、瀟灑園は学者の隠棲のための住居の庭園である。このように、日本と同じく宗教的には仏教文化圏である東アジアにおいても、顕著な構成・意匠を伴う寺院庭園はほとんど見られないのである。

日本の寺院において、いわば必須の装置のごとく庭園が造営されたのはなぜか。このことについては、白幡洋三郎が解釈を試みている^{vi}。白幡がまず挙げるのは、奈良時代の仏教と平安時代の仏教の性格の変化である。前者が国家の安寧を祈願する「鎮護国家」のためのものであったのに対し、後者は個人の救済に関心を移し、人間の内面を追求する姿勢を持つようになる。その結果、山岳・山林での修行を行う僧侶が現れたことで、仏教施設たる寺院に修行環境としての庭園が取り入れられるようになった、とするのである。もちろん白幡は、日本における寺院と庭園の関係の深さをこのことだけに帰しているわけではなく、平安時代には浄土教の浸透とともに自らの別荘を寺院として寄進する貴族が現れ、さらには極楽浄土の具現としての庭園を備えた浄土庭園が造営されたことにも言及している。さらに、金閣寺や銀閣寺が、本来は別荘でありながらも、その造営当初から寺院的な様相を帯びていたことなどにも触れている。こうした白幡の解釈には教えられることも多いが、日本における寺院と庭園の関係については、もう少し丁寧に読み解いておく必要があるように思える。

本稿の目的は、白幡の先行研究に留意しつつ、寺院と庭園との関係の歴史について奈良時代から順を追って整理する

とともに、寺院庭園が観光資源となるわが国独自の状況について宗教観光との関連も含めて考察することである。

II. 寺院と庭園の関係史

1. 奈良時代—法華寺阿弥陀浄土院

奈良時代は、後世につながる日本庭園の意匠が確立された時代である。すなわち、曲池（不整形な輪郭を持つ池）、州浜（緩やかな勾配に小石を敷き詰めた護岸）をはじめとした水辺の柔らかな護岸処理、自然石を用いた景石や石組といった意匠である。飛鳥時代の庭園^{vii}とは全く様相を異にするこの新しい意匠は、唐の庭園意匠の影響を受けながら日本の風土の下で成立したものであった。このことについては、これまで度々述べてきたので^{viii}、深入りはしない。

新しい意匠をもつこうした奈良時代の庭園がどのような場所に造営されたのかを見渡すと、それは平城宮内外の宮廷関連施設であり、平城京内の貴族の邸宅であった。発掘調査で明らかにされた事例としては、宮廷関連では平城宮内の西池宮や東院庭園（図1）、宮の北に隣接する松林苑内の諸庭園、京内の平城京左京三条二坊宮跡庭園などであり、貴族邸宅としては平城京左京三条一坊十五・十六坪や平城京左京三条二坊一・二・七・八坪（長屋王邸）などである。『続日本紀』や『懷風藻』『万葉集』などの文献を見ても、同じく宮廷関連施設と貴族邸宅の庭園が記されるだけである。

一方、平城京とその隣接地には多くの寺院が営まれたが、こうした寺院に意匠を凝らした庭園が営まれることは、原則としてなかった。寺院境内に池を伴う事例としては興福寺と大安寺があるが、興福寺の猿沢池は南大門外の低地に築造された放生池であり、大安寺にあった池も境内の杉山古墳の濠を残したものに過ぎなかった。

こうしたなか唯一例外と言える見事な庭園が造営されたのが法華寺阿弥陀浄土院である。法華寺阿弥陀浄土院は、天平宝字5年（761）、光明皇太后の一周忌を執り行うために法華寺の南西隅に造営された寺院で、その跡地に遺る立石



図1 東院庭園（復元整備後）



図2 法華寺阿弥陀浄土院跡の立石

から庭園の存在が予想されていたが(図2)^{ix}、平成12年(2000)に行われた発掘調査により庭園の一部が確認された^x。それは、屈曲した輪郭を持つ池で、護岸を見ると斜面に平石を張り付けた部分と細長い石を並べた部分がある。さらに、発掘調査区域からは外れているが、前述の立石なども考え合わせると、堂舎の前面に平城宮東院庭園の如き典型的な奈良時代の意匠を持つ庭園が展開していたと推定できる。

なぜ法華寺阿弥陀浄土院にこのような庭園が営まれたのか。それは、法華寺が藤原不比等の邸宅を踏襲して造営された寺院であり、不比等邸の時代の庭園がそのまま引き継がれたからに他ならない。特に阿弥陀浄土院が造営された南西の区画には、もともと園池があり、それが部分的に改修されて阿弥陀浄土院の園池とされたことが発掘調査成果からも明らかになっている^{xi}。さらに付け加えると、観無量寿経などの阿弥陀三部経には、阿弥陀の浄土すなわち西方極楽浄土には宝池があることが記されており、阿弥陀を本尊とする阿弥陀浄土院を西方極楽浄土のイメージに近づける装置として既存の園池を利用することは必然的ともいえる成り行きであったのであろう。

いずれにせよ、他に類例のない奈良時代の寺院庭園である法華寺阿弥陀浄土院の庭園は、藤原不比等邸という貴族邸宅の庭園を引き継いだものであるため、意匠も奈良時代の宮廷・貴族庭園と同様の完成度を持っていたこと、ならびに極楽浄土のイメージに園池が必要であったことの2点により成立したものであった。ただし、留意しておかなければならないのは、奈良時代にこのような庭園が寺院に営まれた事例は他にはなく、法華寺阿弥陀浄土院庭園は、寺院庭園の先駆的事例ではあるものの、この時代においては例外的な存在であったという点である。

2. 平安時代前期一庭園を伴う別荘の寺院への転換

延暦13年(794)の平安遷都後、平安京の郊外には天皇や皇族・貴族の別荘が多く営まれた。平安京を含む京都



図3 大沢池

盆地北部は、平安遷都の詔に「山河襟帯」、すなわち山が襟のように周囲を廻り、河川が帯のように流れ出ると形容されたとおり、優れた景観と豊かな水に恵まれており、こうした景観・環境が平安京の内外に多くの庭園が営まれる素地となったことは言うまでもない。

平安時代前期、平安京の郊外に営まれた皇族・貴族の別荘としては、嵯峨天皇の離宮であった嵯峨院、淳和天皇の離宮であった紫野院をはじめ、清原夏野の双岡山荘、滋野貞主別荘、藤原関雄別荘、源融の棲霞観、藤原氏宗の東山椿峯山荘などが知られる。こうした離宮・別荘は、それらを営んだ主が亡くなった後に寺院に転換されるものが少なかった。そもそも平安京内には官寺たる東寺と西寺を除いては寺院の造営が許されていなかったが、その規則は京外には適用されていなかったため、離宮・別荘は寺院に転換するにあたっての障害がなかったわけである。

京都西郊の北嵯峨に立地する嵯峨院は嵯峨天皇が皇子であった時代からの別荘で、天皇即位後は離宮として主に北野遊獵の拠点あるいは詩宴の場となった。この離宮をことのほか好んだ嵯峨天皇は、退位後はここを仙洞とし、一時的な中断はあったものの、承和9年(842)に逝去するまでここに居住した。貞観18年(876)、嵯峨院は、嵯峨皇女で当時は淳和皇太后であった正子により施入されて大覚寺となる。嵯峨院の園池であった大沢池も概ね姿を変えずに大覚寺に継承され、寺院の中に広大なおかつ意匠を凝らした庭園が存在するという状況が生まれる(図3)。

また、淳和天皇の離宮として京都北郊の船岡山付近に創建された紫野院も園池を備えており、雲林亭とも呼ばれた^{xii}。その後、貞観11年(869)に当時ここを伝領していた常康親王が出家したのに伴い寺院・雲林院となるが、この場合も庭園は概ね継承されたものと考えてよいだろう。

小倉王の子で右大臣も務めた清原夏野の別荘であった双岡山荘は、京都西郊の独立丘陵・双ヶ岡の東麓に営まれ、新造間もない承和元年(834)4月には淳和天皇の行幸を仰

いでいる^{xiii}。この行幸では、天皇が「水樹」を賞美したと記されていることから、双岡山荘にも見事な庭園が設えられていたことがわかる。この双岡山荘も、清原夏野の没後には寺院となって天安寺と称したが^{xiv}、景勝の地に営まれた別荘の庭園は寺院境内の一部として継承されたものと見られる。しかしながら、天安寺も天延2年（974）に宝蔵が焼亡して以後は記録に現れず、時期は不明であるものの廃絶に至ったようである。その後、平安時代末の大治5年（1130）には、その跡地を踏襲して鳥羽天皇中宮待賢門院璋子により法金剛院が造営され、そこには大規模な池庭も築造された。この庭園の築造には仁和寺の石立僧・林賢や徳大寺静意が関わっているが、これが双岡山荘の庭園をいくらかでも継承したものであるのかは不明である。

このほか、滋野貞主の別荘は承和11年（844）に慈恩寺、藤原関雄の別荘は仁寿3年（853）に禅林寺となり、さらに藤原基経の栗田山荘は元慶4年（880）に円覚寺となる。さらに、9世紀末頃には、源融の別荘であった棲霞観が棲霞寺となり、藤原氏宗の東山椿峯山荘が円成寺となる。京都郊外の景勝地に営まれたこうした貴族の別荘には概ね庭園が営まれていたものとみられ^{xv}、寺院として施入されるにあたっては、庭園も併せて境内に取り込まれたであろうことは想像に難くない。

以上に述べたような平安時代前期における平安京近郊の離宮・別荘の寺院への転換が、寺院が別荘の形態を取り、寺院に庭園を伴うことが決して異例ではないという状況を創り出していった。このことが、日本において寺院と庭園が深い関係を持つようになる最初の主要な理由と考えられるのである。

3. 平安時代中・後期—浄土庭園と臨池伽藍の成立

平安時代中期の藤原摂関期からはじまる宗教的潮流として、浄土教の盛行がある。藤原氏の勢力が最高潮に達した時期の氏長者である藤原道長自身も、寛仁4年（1020）、平安京の東縁部にあたる左京一条四坊十五・十六町の自邸・土御門殿の東に隣接する平安京外に園池を伴う無量寿院を造営する。無量寿院は阿弥陀を本尊とする寺院で、西方極楽浄土をイメージして敷地の西部に建てた本堂の前面（東面）に池を配する構成は、平安・鎌倉時代に盛行する浄土庭園の初例というべきものであった。道長は、無量寿院をさらに拡張整備し、毘盧遮那仏を本尊とする金堂の落慶と共に法成寺と改称。阿弥陀を本尊としないにもかかわらず伽藍の中心に園池を備えた「臨池伽藍」が成立する。

藤原頼通が父・道長から受け継いだ宇治川左岸の別荘・宇治殿を寺院としたのが、平等院である（図4）。その落慶法要は天喜元年（1053）、すなわち仏教の教えが衰退する末法が始まると信じられていた永承7年（1052）のまさに翌年のことであった。こうした世相の中、頼通が極楽浄土への自らの往生を願って造営された平等院は、当然のことながら阿弥陀を本尊とし、その空間構成も阿弥陀堂の前面に池を配し

て極楽浄土の具現を目指したもので、その造営当初から阿弥陀堂と園池ならびに周辺景観の美しさが称えられた^{xvi}。近年の発掘調査により、池中の湧水を水源とする曲池の汀は緩い勾配の岸に小粒の礫を敷き詰めた州浜であったことが明らかにされており、極彩色を施した優美な姿の阿弥陀堂が園池と一体となって見せる情景は極楽浄土を彷彿とさせるものであったと言えよう。なお、阿弥陀堂としては、阿弥陀仏一軀を祀る平等院型の阿弥陀堂のほか九体の阿弥陀仏を収める九体阿弥陀堂も多く建てられ、そうした九体阿弥陀堂の前面にも池が設えられた。これもまた浄土庭園であり、平安時代末期に造営された遺構として唯一現存するのが浄瑠璃寺庭園である（図5）。

一方、阿弥陀を本尊としないにもかかわらず、中心となる仏堂の前面に園池を配する臨池伽藍の造営の事例としては、白河上皇の御願寺である法勝寺や奥州平泉において奥州藤原氏二代の基衡による造営とされる毛越寺などがある。前者は、大日如来と胎藏界四仏を安置した金堂の南面に池を穿ってその中に中島を配し、その中島に大日如来と胎藏界四仏を納めた九重塔を建てており、その宗教理念は密教であった。そのうえで、金堂の北西方には五大堂、背後には講堂と薬師堂



図4 平等院（園池復元整備後）



図5 浄瑠璃寺（園池復元整備後）



図6 毛越寺庭園南西岸築山石組と池（復元整備後）

を配し、園池の西に阿弥陀堂を置くという空間構成を持つ。密教理念の伽藍でありながら、池がその不可欠の構成要素となっているわけである。一方、後者では、薬師を本尊とする金堂・円隆寺とその西の嘉祥寺という二つの仏堂が並び立つが、そのうちの円隆寺の南正面に池を配置する。大泉池と称するこの池は東西約 180 m、南北約 90 m と広大で、その水面の中央には中島を配する。池の護岸は州浜で、北東部の遣水流入口付近などには石組を置き、南西岸には築山石組、南東岸から伸びる岬の先端の池中に小島を置いて立石を据えるなど意匠を凝らす（図6）。毛越寺のこうした空間構成と意匠は、伽藍のなかで園池が極めて重要な役割を果たしていたことを如実に表す事例と言えよう。

以上のように、平安時代の中後期には、極楽浄土をこの世に具現するという観念のもとで園池を必須の要素とする浄土庭園の形式が確立し、さらに園池が伽藍の中心的な位置を占める臨地伽藍も出現する。ここにおいて、寺院のなかに庭園が築かれるという日本独自の寺院と庭園の関係が定着したといっても過言ではないだろう。浄土庭園・臨地伽藍は、平泉の寺院群に感銘を受けた源頼朝が鎌倉に永福寺を造営したのを皮切りに、鎌倉時代においても樺崎寺や称名寺など関東の諸寺に造営され続ける。

ちなみに、日本と同様に浄土信仰が盛行した中国においては、敦煌の壁画に見られるように天蓋（仏堂）の下に座する阿弥陀の前に池を配する極楽浄土の図像は見られるものの、実際に池を伴う寺院伽藍はほとんど見られない^{xvii}。このことが示すのは、貴族の別荘を転換した寺院における庭園の存在がすでに受容されており、また、平安時代の貴族住宅である寝殿造において建物前面に池を配置するという空間構成がそのまま浄土庭園に援用しえたという日本独自の特殊性である。

4. 平安後期から鎌倉時代—石立僧の活躍

平安時代の後期以降、寺院と庭園との関係が深まる中、実際の作庭の担い手として注目されるのが、僧でありながら作

庭を専門的職能とした石立僧である。前述の通り、法金剛院の作庭を主導したのは伊勢坊林賢や徳大寺法眼静意といった仁和寺の僧であった。『長秋記』には、大治 5 年（1130）の造営当初、静意が泉石を立て、林賢が滝石組みを組んだことが記され、3 年後の長承 2 年（1133）には静意が女院（待賢門院璋子）から滝を 5・6 尺高くするように指示されて改修に携わったことが記される^{xviii}。ちなみに、平野神社の水石庭に携わったのも仁和寺の僧であり、南禅院の作庭を行った心遍（了遍）も仁和寺系であったといわれるように^{xix}、真言宗の門跡寺院である仁和寺が石立僧の一つの拠点であった。もちろん石立僧は仁和寺の僧に限られたわけではなく、源頼朝が鎌倉に永福寺を造営するにあたり、庭の立石のために招聘された静玄は園城寺の僧であったし、ほかにも内山永久寺の作庭に携わった信亮坊や浄信坊、称名寺の作庭を行った性一法師などの名が知られる。いずれにせよ、僧が作庭を専門的な職能として担ったことは、寺院と庭園の関係が極めて深かったことの証左であり、なおかつその関係をより深めていくことに繋がったと考えてよいだろう。

ところで、仁和寺と庭園の密接な関係をうかがわせるものに作庭書がある。鎌倉時代の制作と考えられる作庭書『山水口野形図』の現存する写本は、仁和寺心蓮院の僧が文正元年（1466）に書写したものである。陰陽五行・吉凶相剋・真言の儀軌などに基づく内容は『作庭記』とは異なる系統とみなされており、仁和寺流というべき作庭の流派の存在が窺える。仁和寺における石立僧の輩出が、こうした流派の成立に繋がったとみることもできよう。

ちなみに、白幡洋三郎は、仁和寺と庭園の密接な関係について、宗派が真言宗であることよりも歴代の法皇や親王が居住する最初の門跡寺院であったことがその理由である、との正鵠を射た指摘をしている^{xx}。

5. 鎌倉時代—蘭溪道隆による建長寺建立と境致

栄西によって日本に伝えられた禅宗は、鎌倉幕府の庇護を受け、鎌倉時代の仏教における新たな勢力となる。そして、この鎌倉時代の禅宗の発展に大きな役割を果たしたのが、中国からの渡来僧たちであった。

渡来僧・蘭溪道隆は鎌倉幕府五代執権・北条時頼に請われて建長寺の開山となり、鎌倉特有の谷戸と呼ばれる谷地形を選び、谷の軸線上に総門・山門・仏殿・法堂・礼間・得月楼を一系列に配置する伽藍配置を採用する。堂舎を一直線上に並べるこうした中国式の伽藍配置は、日本でもすでに京都の泉涌寺などで導入されていたが、ここで注目されるのは最後尾の得月楼と大客殿の背後に曲池を中心とする庭園を配していることである。池は谷筋から流れ来る水をいったん受け止めるという役割も果たしていたであろうが、元弘元年（1331）に原本が作成された『建長寺伽藍指図』^{xxi}（図7）には大客殿に付設された池に迫り出す釣殿状の建物も描かれており、

園池としての造作がなされていたことは疑いない。また、得月楼の具体的な意匠は定かでないが、その名称からは二層以上の建物と見るのが妥当で、得月楼の二層からは庭園の観賞が行われたものと推測される。すなわち、大客殿や得月楼といった伽藍最奥部の建物群は、宗教的な儀式に用いるというよりも寺院としての接遇施設の機能をもっていたと考えられ、庭園はその視覚的接遇の重要な要素の一つであったわけである。なお、ここで留意しておきたいのが、中国・南宋における五山の寺院において一直線状に並べた堂舎の最奥部に園池を配置する事例はないことである。すなわち、建長寺における園池の築造は蘭溪道隆の発想であったと考えられるのである。その理由としては、来日後に約1年間滞在した京都での寺院と庭園の関係の実見が関与していたことも考えられる^{xxii}。一方、同じく渡来僧の無学祖元が開山となって造営された円覚寺でも、虎頭岩と呼ぶ岩盤を景色として活かしながら園池・妙香池を方丈の裏手に設えており、伽藍内に庭園を設けることに対する渡来僧の共通した意識も垣間見える。

中国・南宋では、禅僧は伽藍一帯の自然の山河あるいは人工の建物・橋・庭園等の景観に対峙し、それらを偈頌（詩）で表現することでその卓越性を意識化した。詩に詠まれた優れた自然の山河や建物等を境致と称すが、10の境致を選ぶ

ことが多く、それが十境である。蘭溪道隆や無学祖元らの渡来僧は境致の思想に慣れ親しんでいたと考えられ、そこで養われていた風景に対する鋭敏な感覚が建長寺や円覚寺の庭園を生み出す素地となったと見ることも可能であろう。日本に伝えられた境致の思想のもと、禅僧は境致を撰するという行為のなかで風景に対する感覚を研ぎ澄まし、そのことが禅宗寺院内の優れた庭園の築造と表裏一体の関係を形成する。

以上のように、鎌倉時代の日本仏教における新たな潮流である禅宗においても、庭園は境致の思想とも絡みあいながら、寺院境内の中で重要な位置を獲得する。そして、そのことは次代以降の禅宗寺院における庭園文化の隆盛の基盤となるのである。

6. 南北朝時代—夢窓疎石の活躍

南北朝時代を代表する禅僧であるとともに、日本庭園の歴史にも大きな足跡を残した人物として知られるのが、夢窓疎石である。建治元年（1275）に伊勢国で生まれ、甲斐国で育ったとされる夢窓疎石は、臨済宗仏光派の高峰顕日の法嗣となった後、弟子が集う煩わしさを避けるように全国を転々としながら、景勝の地を居所とし、併せてそこに庭園を営むこともあった。美濃の虎溪山永保寺、土佐の五台山吸江庵、相模の泊船庵、上総の退耕庵などである。後醍醐天皇からも尊崇を受けた夢窓疎石は、正中2年（1325）、その勅命により京都五山の別格であった南禅寺の住職となるが、それさえも短期間で辞して鎌倉の瑞泉寺や甲斐の恵林寺に住し、そこでも庭園を築いている。

その後、京都に戻った疎石は、暦応2年（1339）に吉野で崩御した後醍醐天皇の菩提をとむらうため、足利尊氏に進言し、開山となって天龍寺を創建する。天龍寺は、堂舎を一直線上に並べ最奥部に庭園を置く建長寺と同様の伽藍配置であった。庭園は、背後の亀山を近景に、大堰川を隔てた対岸の嵐山を遠景に取り込んだもので、その中心をなすのは東西35m、南北50mの曹源池と呼ぶ曲池である。方丈から見て対岸に当たる池西岸は地形に即した輪郭を持ち、中央の龍門瀑とその前の入江にかけた三連の石橋、さらにその前方の池中立石一帯の意匠は日本庭園史上屈指の傑作と評価されている（図8）。ちなみに、曹源池も夢窓疎石が撰した天龍寺十境のうちの一つの境致である。

京都における疎石の作庭として、天龍寺と並ぶ傑出した作例として知られるのが西芳寺である。暦応2年（1339）、疎石は奈良時代創建と伝えられる西方寺に入山し、浄土宗を禅宗に改めて西芳寺とする。もともと浄土系の伽藍配置を基盤としたため、堂舎を一直線に並べて最奥部に庭園を置く天龍寺のような禅宗式の伽藍配置は採っていない。庭園は、黄金池と呼ぶ池が広がる下段の区画と洪隠山と称する枯山水石組を中心とした上段の区画に分かれる。疎石による復興当初、下段の庭園は、西芳寺川から導水した黄金池を中心とし

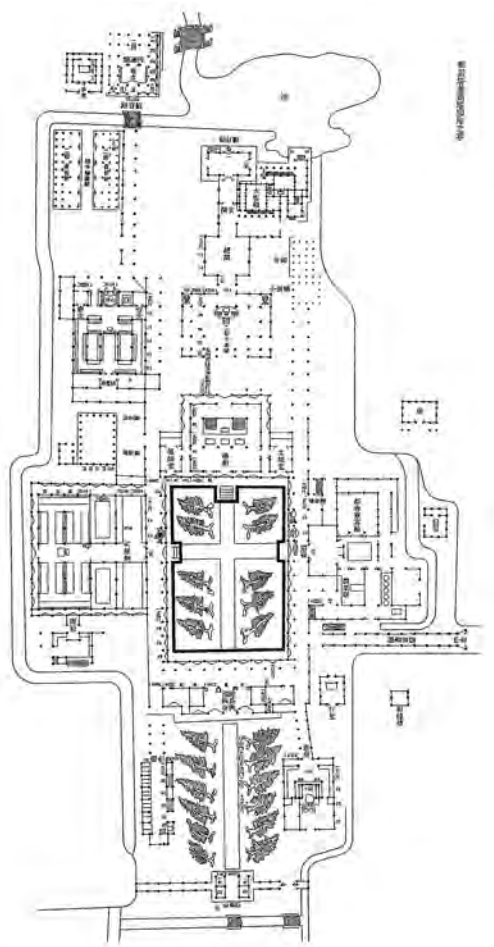


図7 建長寺伽藍指図写



図8 天龍寺庭園の龍門瀑・池中立石

て、西岸半島上に重層の瑠璃殿、北岸に西来堂と潭北亭、中島に湘南亭を配置し、マツやサクラ、カエデなどの植栽を施した華麗な庭景を見せていたことが知られている。『園太暦』貞和3年（1347）2月20日条には参詣した光厳上皇の一行が花見と池での舟遊を楽しんだ様子^{xxiii}が記されるほか、後年には室町幕府八代将軍・足利義政がたびたび訪れて紅葉などを楽しんだことが『蔭涼軒日録』などに記録されており、西芳寺は寺院でありながら別荘の側面を有した独特の存在であったことが窺える。

以上のように、風景に対する鋭敏な感覚と優れた造形力を備えていた夢窓疎石であるが、晩年の天龍寺と西芳寺の庭園が他に抜きん出ている理由としては、景観と水に恵まれた京都の地勢もさることながら、実際の作庭を担う経験豊かな技術者層の存在が大きかったとの指摘がある^{xxiv}。この指摘は重要であり、京都には石立僧やその指示のもとでの作業に従事する専門的集団がおり、彼らの存在が天龍寺や西芳寺の庭園に結実したと見ることができよう。いずれにせよ、夢窓疎石による作庭は、禅宗寺院における庭園の存在感を際立たせ、禅僧による作庭活動の規範ともなったのである。

7. 室町時代—鹿苑寺（金閣寺）と慈照寺（銀閣寺）

建築と庭園が一体となった西芳寺庭園の空間構成の影響のもとに造営されたのが、三代将軍・足利義満が造営した北山殿、ならびに八代将軍・足利義政が造営した東山殿で、この二つの山荘は、それぞれ義満と義政の没後に鹿苑寺（金閣寺）、慈照寺（銀閣寺）となる。鹿苑寺・慈照寺ともに、応仁の乱や引き続く戦乱で荒廃し、江戸時代の初頭に大改修が行われたことが知られている。大改修にあたっては、それぞれの金閣・銀閣の位置は変わっていないものの、他の部分は建物位置も含めて大きく改変されており、このことについては、留意しておく必要がある。

まず、北山殿は、義満が公家の西園寺家との所領交換によりこの地にあった西園寺家の別荘・北山第を入手して大改

修を加えたもので、義満没後に施入されて鹿苑寺となる。西園寺家の北山第の庭園が見事であったことは、池泉の清澄や滝の雄大さを記した藤原定家の『明月記』の記載からも窺える^{xxv}。義満による改修は極めて大規模なものであったと考えられるが、なかでも特徴的なのは池畔に築いた三層の楼閣・舍利殿である。二層・三層の全面に金箔を張った外観から金閣と通称されるこの建物は庭景の焦点となるとともに、二層・三層から庭園を眺める視点場としての役割も果たした（図9）。舍利殿は西芳寺の二層の楼閣・瑠璃殿を強く意識して建てられたもので、西芳寺の影響の大きさを改めて感じさせる。ちなみに西芳寺の瑠璃殿の二層は舍利殿と呼ぶ仏間であったが、金閣も三層は建物名称でもある仏間の舍利殿であり、庭園建築でありながら仏教的色彩を帯びたものであったわけである。

一方、東山殿は、応仁の乱以前に山荘造営を構想していた義政が、乱の終結後間もない文明12年（1480）から山荘の適地を探し始め、同14年に延暦寺末の東山山麓の浄土寺の寺地を没収して造営に着手したもので、建築・庭園を合わせたその造営は義政の亡くなる延徳2年（1490）まで続けられたことが知られる（図10）。義政の没後、東山殿はその遺命により寺院とされ、義政の法号から慈照寺と名付けられる。東山殿は、義政が度々訪れていた西芳寺をそのモデルとしたことが当時の記録からも窺え^{xxvi}、建物の名称も西芳寺を意識

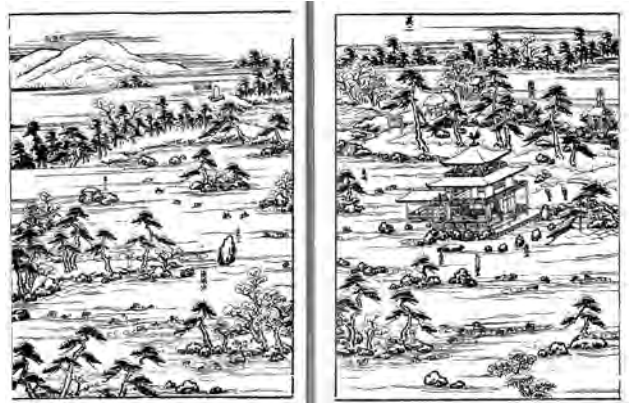


図9 『都林景名勝図絵』に描かれた金閣寺



図10 東山殿復元図（川上貢による復元図）

したものであることは間違いない^{xxvii}。東山殿に見える仏教的要素という観点で、東求堂と観音殿（銀閣）に注目してみたい。東求堂は、同仁斎の存在から書院建築のイメージが強いが、本来的に阿弥陀を本尊とする持仏堂であった。その東求堂の東面には義政の指示により「蓮池」が穿たれ、浄土庭園の空間構成がこの部分に組み込まれていたことを飛田範夫が指摘している^{xxviii}。また、二層の楼閣である銀閣は西芳寺の瑠璃殿をモデルとしたもので、一層は住宅建築様式、二層は禅宗様式の仏間の構成となっている。山荘として造営された東山殿が、その空間構成ならびに個々の建物の在り方のいずれにおいても、西芳寺をモデルとしていたことは、白幡洋三郎も指摘するように、東山殿が当初から寺院的空間の性格を帯びていたことを示していると解釈できるのである。

いずれにせよ、この時代を代表する庭園を備えた北山殿と東山殿がそれぞれ金閣寺・銀閣寺と通称されながら現在に至るまで存続したことは、わが国における庭園と寺院との不可分の関係を形成するうえで、極めて重要な事象と位置付けることができる。

8. 室町時代—禅宗寺院における作庭

いわゆる南北朝期の夢窓疎石の活躍もあり、室町時代の禅宗寺院において、庭園は重要な位置を占めるようになる。足利將軍家と密接な関係を持った相国寺には、とりわけ足利義政の時代を中心に庭園が営まれたようであるが、ここでは大仙院が現存するなど室町時代後期において禅宗寺院庭園文化の一つの拠点となった大徳寺を中心に述べておきたい。

鎌倉時代に始まる五山十刹の制度は、室町時代になると明確な序列の下での幕府による管理強化が進む。そうしたなか、皇室とのつながりの強かった大徳寺は、永享3年（1431）以降、五山の制度の埒外の林下（在野寺院）としての道を選ぶ。応仁の乱では荒廃するが、その後、住持・一休宗純の禅風に共感した堺の商人の援助や戦国大名の帰依により着々と復興が図られ、寺院境内の子院である塔頭も増加する。

大徳寺山内の大仙院は、古岳宗亘を開山として永正10年（1513）に創建された塔頭で、本堂である方丈もその時の建造である。方丈は前後二列・各列三室の六室構成で、方丈前面には全面白砂敷きの空間が広がるが、庭園として注目されるのは、住職の居室である後列東側の書院に面してL字形に展開する枯山水である。刈込と大立石で遠山・懸崖を、その奥の立石で滝を表し、さらに様々な形状の石と砂を用いて滝から落ちた水が溪流となり橋をくぐり大河となって海に流れ下る様相が具象的に表現されており、山水画の三次元化といった捉え方もできる（図11）。この庭園は、和尚の没後に弟子がまとめた『古岳和尚道行記』の「禅余、植珍樹、移怪石、以作山水趣」との記述などから古岳宗亘自らの構想による作庭と考えられており、作庭を好み自ら関わる禅僧の存在が浮かび上がる。



図11 江戸時代の『築山庭造伝』に描かれた大仙院庭園

この大仙院に限らず、大徳寺山内の塔頭に庭園が設えられていたことが、ポルトガル人宣教師ルイス・フロイスの『日本史』の記述からも窺える^{xxix}。永禄8年（1565）に念願の京都入りを果たしたフロイスは、関係者の案内でいわば京都の名所めぐりをしている。足利將軍邸・細川管領邸のほか、祇園社・東福寺・鹿苑寺などの社寺を訪れており、大徳寺では訪れた二つの塔頭で庭に関する記述が見られる。一方は「廻廊と緑の庭園」と記されるだけで庭園の構成・意匠については不明であるが、もう一方についてはかなり詳細な記述がある。その描写を整理すると、庭景の中心として石を多用した築山を築き、地面に粗い白砂と小粒の黒石を敷き詰め、随所に1mあるいはそれ以上の景石を据えろといった構成で、築山上には灌木を植え、幅30cm余りの道をつけ、同じく幅の橋を架けるといったものであった。さらにフロイスは、禅宗を現世利益的な教義を持つと紹介したうえで、僧侶たちは家屋の優雅さ、清潔さ、庭園の技巧に秀でることに専心する、とも書いている。フロイスの記述は案内者からの説明に基づくものであろうが、当時、禅僧たちが作庭にいそしんでいるとの一般的な認識があったことが示されている点は興味深い。なお、フロイスが訪れた京都の寺院のうち、大徳寺の二つの塔頭を含め7か所で庭園に関する記述が見られるが、そのうち金閣寺の庭園では散策に訪れる都人が多いことが記される。

以上のとおり、大徳寺大仙院の書院庭園の作庭やフロイスの著作に鑑みれば、少なくとも室町時代の後期において、大徳寺のような禅宗寺院で禅僧による旺盛な作庭活動が行われていたことは疑いのないところである。

9. 江戸時代—京都の諸寺の庭園

平安時代以来の庭園文化の中心であった京都における江戸時代の寺院の庭園の様相については、飛田範夫が史料等に基づきながら的確に取りまとめているので^{xxx}、これを参照しながら概略を記しておきたい。

まず、徳川將軍家に関係する寺院の庭園として、浄土宗の

知恩院と天台宗の養源院がある。知恩院は寛永10年(1633)の火災により創建時の主要建物が失われたため、三代将軍家光が将軍家菩提寺としての位置付けで復興を図り、その際に建物と共に庭園も整備されたらしく、さらに天和年間(1681～84)に再整備されたことが記録に残る。一方、養源院も従来の伽藍が焼失したのちの元和7年(1621)に二代将軍秀忠の正室・江により再建され、庭園も整備されたようである。両者の庭園は、いずれも寛政11年(1799)刊行の『都林泉名勝図会』に挿図とともに掲載されている。

次に、浄土真宗の二つの本山である東西本願寺の庭園に注目しておく。西本願寺では、大書院の東面に展開する大書院庭園と境内南東隅にある滴翠園が今も遺る。大書院庭園は、大型の石を用いた豪壮な枯山水で、建築との関係からすると、慶長13年(1608)に築造され、寛永10年(1633)に改修されたと見られる。滴翠園は飛雲閣を中心に池が広がる比較的小規模な回遊式の庭園で、江戸時代初頭に築造されたもの。一方、東本願寺には、引退後の門主のための別邸である涉成園がある。三代将軍家光による土地の寄進は寛永18年(1641)で、庭園が完成したのは明暦3年(1657)頃とされる。敷地面積35,000㎡と広大なこの庭園は、印月池と呼ぶ大きな園池を中心とした回遊式庭園で、東正面には東山三十六峰の一つである阿弥陀峰を望む(図12)。なお、滴翠園と涉成園は『都名所図会』に、西本願寺大書院庭園は『都林泉名勝図会』に、いずれも挿図付きで掲載されている(図13)。

天皇・公家関係の寺院である門跡寺院に話題を移す。皇室関係の門跡寺院である宮門跡としては、勸修寺・青蓮院・妙法院・曼殊院がある。平安時代の創建である勸修寺は、江戸時代になると徳川将軍家の庇護を受けて伽藍の復興が進み、園池である氷室池も整備される。青蓮院も室町時代から評判の高い園池が存在し、江戸時代にはそれを引き継ぎつつ改修がなされた。妙法院の庭園は積翠園の名で知られ、寺地を現在の東山七条に定めた江戸時代初期に造営された



図12 渉成園

ものと見られる。園池は広く、舟遊も可能な回遊式庭園であった。曼殊院は現在の比叡山麓一乗寺に寺地を定めた明暦2年(1656)の直後から堂舎と庭園の整備が進む。現在は枯山水の庭園であるが、境内を描いた挿図が載る『拾遺都名所図会』が刊行される18世紀末頃までは池庭であったらしい。摂関家関係の門跡寺院であった大覚寺は、前述のとおり平安時代初頭に築造された嵯峨院の後身である。その園池である大沢池は、江戸時代には、平安時代と同様に観月の名所であった。同じく摂関家関係の門跡寺院であった醍醐寺三寶院は、桃山時代に豊臣秀吉の援助で建物と庭園の一新に着手するが、秀吉の死により計画は変更を余儀なくされる。庭園は一応の完成は見えていたものの、その後も当時の醍醐寺座主・義演准后により改修が繰り返され、元和10年(1624)頃には回遊式の庭園となっていたと考えられる^{xxxi}。なお、門跡寺院の庭園は、『都林泉名勝図会』には掲載されておらず、これらが一般的な見物の対象となっていなかったことがわかる。

続いて、禅宗の寺院を見てみたい。前述のとおり禅宗寺院では室町時代において作庭が盛んであったが、江戸時代にもそうした庭園は維持され、改修され、さらに新造される。夢窓疎石の築造した天龍寺では、堂舎は度重なる火災でしばしば失われたものの、園池は比較的良好に保たれていたと考えられる。同じく夢窓疎石の手になる西芳寺は、室町時代後半の戦乱によりかなり荒廃していたが、園池を中心とした骨格は維持されており、桜の名所として賑わっていたという。金閣寺も荒廃していたが、江戸時代初期に住職であった鳳林承章による寛永から慶安年間にかけての改修が進められ、復興がなされている。また、銀閣寺では、徳川家康に仕えた武将である宮城豊盛が、建物の配置換えを含む大改修を行い、庭景を一新することとなる。大徳寺では江戸時代初期に本坊の方丈が現在の位置に建てられ、その南面と東面には枯山水の庭園が作られる。大徳寺では、小堀遠州の私的な寺院として孤篷庵が営まれ、忘筌露地をはじめとした斬新な意匠の庭園が営まれる。南禅寺では、徳川家康の信任が厚かった崇伝の住坊である金地院の庭園が幕命を受けた小堀遠州の設計で築造されており、その意匠は鶴島・亀島と礼拝石を中心とす



図13 『都林泉名勝図会』に描かれた西本願寺大書院庭園



図 14 龍安寺方丈庭園

る枯山水で、将軍を迎える祝儀の意を持つものであった。石庭として知られる龍安寺方丈南面の枯山水は、その築造時期に室町時代説から江戸時代説があるが、少なくとも江戸時代の早い時期には現在見る姿で築造されていたことは確かであろう（図 14）。

法華宗系の庭園にも庭園は築造された。蓮池と日輪石を構成要素とすることで知られる本法寺庭園、うろこ状に石を並べた枯池を特徴とする本圀寺真如院の枯山水などは、『都林泉名勝図会』にも掲載される有名な庭園であった。

以上、江戸時代の京都の庭園について、飛田の論考に沿いながら概略を示したが、江戸時代の京都では宗派を問わず、寺院にはそれぞれ工夫を凝らした庭園が営まれていたことが明らかである。京都におけるこうした寺院庭園の様相は、全国各地の寺院が属する宗派の本山の多くが京都にあることに鑑みれば、当然のことながら、全国各地の寺院の庭園の在り方に反映していく。江戸時代において庭園は、宗派を問わず寺院における必須の装置となったと言っても過言ではないだろう。そうしたなかで、庭園の観光資源としての位置付けも定着していくのである。

10. 小括

以上、日本における寺院と庭園との関係について、奈良時代から江戸時代までの歴史を見てきた。その寺院と庭園の関係史を簡潔に取りまとめると、次のような流れとなる。

- ① 奈良時代、藤原不比等邸から寺院に転換した法華寺の阿弥陀浄土院に極楽浄土をイメージした庭園造営。
- ② 平安時代前期、皇族・貴族の平安京郊外の別荘が庭園ととも寺院に転換。
- ③ 平安時代中・後期の浄土庭園あるいは臨地伽藍の成立とその波及。
- ④ 平安末期から鎌倉時代にかけての作庭の実際の担い手としての石立僧の活躍。
- ⑤ 鎌倉時代の渡来僧による庭園を伴う禅宗伽藍形式の

確立と境致の思想の定着。

- ⑥ いわゆる南北朝期における夢窓疎石の作庭活動。
- ⑦ 室町時代の将軍による当初から寺院の様相を帯びた山荘・北山殿と東山殿の造営。
- ⑧ 室町時代の禅宗寺院における禅僧の枯山水庭園築造等の作庭活動。
- ⑨ 江戸時代の京都における宗派を問わない寺院庭園の築造とその全国各地への波及。

ここに見られるのは、各時代において、様々なかたちで寺院と庭園が関係を深めてきたことである。そして、こうした歴史的過程を俯瞰するとき、寺院の庭園が貴族の庭園と密接な関係のもとに発展してきた様相が浮かび上がることも併せて指摘しておきたい。

III 宗教観光と庭園観光

1. 宗教観光

観光の定義は様々であるが、観光者の行動様式と目的ならびに観光対象との経済的な関係に着目すると、「人が日常生活圏を一時的に離れ、非日常の好ましい時間と空間を、対価を支払って享受すること」といったところが妥当であろうと筆者は考えている。一方で、人類の歴史における旅行の起源については宗教的動機が取り上げられることが多い。こうした宗教的動機を持つ旅行が宗教行為以外の要素も包含した観光に繋がっていくという流れも言及され、この観光のあり方が宗教観光（宗教ツーリズム）と規定される^{xxxii}。

中西裕二によれば、宗教は、地域や文化を横断して信仰される普遍宗教と特定の地域や文化圏に限定される民族宗教に分類されるが、そのいずれにも共通する宗教的行動に巡礼、すなわち聖地や宗教的施設を訪れる宗教的実践があるという。そして、巡礼の目的地は信者の居住地から遠く離れた場所にあることが多いため、宗教の形態にかかわらず、巡礼はほぼ普遍的に旅を伴い、旅行の起源となるとする^{xxxiii}。収入を得るための生業あるいは業務以外で日常生活圏を一時的に離れる旅行という行為が難しかった時代においては、どの国・地域であれ、巡礼に代表される宗教的活動が旅行を生起する極めて重要な動機であったことは容易に想像がつく。とはいえ、巡礼は宗教的位置付けや付随する儀礼などを重要な要素とするものであり、聖地巡礼をいわば義務づけるイスラム教や聖と俗の区分が厳密なキリスト教等においては、近年の世俗化以前の伝統的巡礼が上記の観光の定義における「享受」という概念と若干の違和感を生じることも確かであろう。

一方で、日本においては、少なくとも江戸時代には、日常生活圏からの一時的な離脱という巡礼の状況が、聖地礼拝の前後、特に聖地礼拝という主目的を達成した後には解放感につながり、非宗教的な時間と空間を享受することが稀ではなかった。すなわち、江戸時代の伊勢参宮や寺社参詣は信仰を主な動機としながらも、その途上で風光明媚な場所や食

などを楽しむことが自明視されていたと山中弘が指摘するように^{xxxiv}、そこには観光の側面も色濃く窺えるのである。こうした江戸時代の日本の状況については、宗教的動機を基盤にしつつ景観や食といった他の要素からなる時間と空間も併せて享受する宗教観光が成立していたとみなすこともできるのである。

2. 中世以前の庭園と観光

視覚的接遇あるいは饗宴等の舞台装置として用いられるのが庭園の一つの重要な機能であり、日本においても庭園はそうした機能を果たしてきた。しかしながら、日本の奈良時代から室町時代前半までの時期においては、接遇される側に立つのが日常生活圏を離れて訪れた遠来の客ということは極めて稀であり、庭園を観光資源であったと捉えることは難しい。奈良時代の初頭、長屋王が庭園を備える自らの別邸・作室（佐保）楼に新羅からの使節を招待して宴を催しているが^{xxxv}、これは例外的な事例であろう。

こうしたなか、庭園観光、しかも寺院庭園観光の観点で注目されるのが、室町時代に李氏朝鮮の外交使節の一員として来日した宋希璟および申叔舟による京都・西芳寺の見聞記である。応永27年（1420）に日本を訪れた宋希璟は『老松堂日録』^{xxxvi}「遊西方寺」のなかで、その庭景を「此の寺、東軒の下に大池を鑿ち、池中に三小島を築く。一島は青松を種え白沙を舗き亭を作る。二島は小楼を構え、西の島の楼上に各色の舍利を蔵す。水は花林より下りて流入す。遊魚は池に満ち、また浮鴨あり。三島に往来の時に乗る所の小舟あり。池の三面は花木叢鬱として、剪りて二層と作す。満林松竹なり。花林池水は清涼を作し／松竹烟霞午梵長し／半日坐して来りて勝事を探れば／東区に一西方あり」と記す。このほか、仁和寺の子院であった心蓮院・修心亭に関する記述の中でもわずかながら庭園が記述される。一方、嘉吉3年（1443）に来日した申叔舟は「日本栖芳寺遇真記并賦」のなかで、天龍寺を訪れた後に西芳寺を訪ねたことを記したうえで、西芳寺の庭園の構成や意匠についてかなり詳細に書き記している。こうした記述に鑑みれば、この頃の西芳寺庭園は遠来の来訪者にとっては外すことのできない名所すなわち観光資源であったとみなすことができる。

また、室町時代末近くの京都では、寺院のほか上級武家屋敷のものも含めて、限定的とはいえ庭園が観光資源として機能していたと考えられる。ポルトガル人宣教師ルイス・フロイスが永禄8年（1565）に入洛した際に案内者に伴われて金閣寺・大徳寺・東福寺といった寺院あるいは細川邸や足利將軍邸といった邸宅の庭園を訪れ、その特徴等についての所見を書き残していることは、第Ⅱ章8で記したとおりである。

3. 江戸時代の庭園観光

それまでの時代に比べて概ね平和な時代であった江戸時代は、農業生産力の向上に伴う地域経済の発展や交通網たる街道整備もあって、実質的に観光を目的とした旅が普及した時代でもあった。もちろん幕府による規制により特に農民層の移動や旅は厳しく制限されていたが、医療を目的とする湯治と信仰を目的とする寺社参詣は、封建制を維持する目的に適うものとして容認されていたという^{xxxvii}。概して遠方を目的地とする寺社参詣の旅は、前述のとおり観光の側面が強かったが、その中心をなしたのが「お伊勢参り」と呼ばれた伊勢参宮や善光寺参り、西国三十三ヶ所観音巡りなどであった。

特に盛んであった伊勢参宮では、全国各地から多くの庶民が伊勢神宮を訪れたが、その特徴は伊勢神宮への参拝のみを行うのではなく、その前後、特に参拝後には様々な場所に足を延ばしたことである。この傾向は関東や東北など特に遠方からの参拝者に強く、その行動範囲は様々ではあるものの、経路の中で京都は一般的に最も長い滞在時間をかける場所であった^{xxxviii}。また、西国三十三ヶ所観音巡りでは、三十三ヶ所のうち京都の洛中・鴨東に頂法寺（六角堂）や清水寺など5ヶ寺があり、郊外の醍醐寺や善峯寺などの4ヶ寺を含めると、9ヶ寺が京都とその郊外にあった。そのため、この巡礼行程のなかで京都は最も重要な目的地であったと言える。西国三十三ヶ所巡りはもちろんのこと、伊勢参宮の帰途でも、京都における主な訪問先は寺社であったが、その実態は参詣に絡めた名所見物の要素がかなり強かったと見られる^{xxxix}。

こうした風潮の中、旅行案内にもなる京都関連の地誌が多く刊行される。なかでも寺社を鳥瞰的に描いた挿図付きの名所案内書として画期をなしたのが、秋里籬嶋が著した『都名所図会』である。安永9年（1780）に京都で出版されたこの書籍は、その体裁から考えると必ずしも携行用のもではなかったが、寺社の由緒等とともにその情景を視覚的に認識させる構成が人気を博し、天明7年（1787）には補遺版である『拾遺都名所図会』も刊行される。『都名所図会』『拾遺都名所図会』合わせて、当時の人々の京都の寺社観光の促進に貢献するところが大きかったことは言うまでもない。

ところで、この両書に取り上げられた寺社、特に寺院のなかには、庭園についてその歴史由緒等が記述されるとともに境内でのその様相が挿図に描き込まれたものも少なくない。寺院ではない「藪内茶亭庭中之図」を含め、その数は20か所。つまり、庭園は寺院参詣に付随する大事な見物場所として認識されていたわけである^{xl}。そして、京都の庭園と名勝地に特化した挿図付き案内書である『都林泉名勝図会』が同じく秋里籬嶋の著作として寛政11年（1799）に刊行されたことは、寺院の庭園が参詣に伴う見物場所として人気を博していたことを如実に示している。

『都林泉名勝図会』の挿図は140点以上に及ぶが、その

うち庭園図は約 90 点で、残りは有職故実図と盛り場・催事の遊楽図などである。これらの庭園図のうち、貸席・料亭や揚屋あるいは個人住宅を除いた寺院の庭園を数えると 72 点となり、三つの庭園図が掲載された高台寺ならびに二つが載る銀閣寺と松花堂をそれぞれ一寺と数えると、69 か所が見物対象となる寺院として認識され、収録されていたことになる^{xii}。実はこの中には、第Ⅱ章9で取り上げた門跡寺院の庭園は含まれていない。門跡寺院の庭園は紹介者や伝手なしでは見物できなかったことがその理由と考えられ、逆に言えば『都林泉名勝図会』所載の寺院の庭園は、見物客に開放されていたということになる。これらの庭園の見物が有料であったかどうかは、個々の庭園について当時の旅日記等を詳細に調べなければならないが、江戸時代の後期あるいは末期には、少なくとも金閣寺・銀閣寺・高台寺等は有料であったことがわかっている^{xiii}。

このように、伊勢参宮に伴う寺社参詣や西国三十三ヶ所観音巡りなどに関連した観光目的地となっていた江戸時代の京都において、寺院庭園は明らかに重要な観光資源であった。そして、それは寺院参詣という宗教観光との融合であるがゆえに、より無理なく、有効に機能したとの見方も可能であろう。こうした状況が成立した基盤として、第Ⅱ章で述べてきたように、様々な形で相互の関連を深めてきた日本独自の寺院と庭園の歴史があることを十分に認識しておくことが重要と考える。

Ⅳ. まとめ

本稿では、第Ⅱ章において、わが国における寺院と庭園の関係史をとりまとめた。繰り返しになるが、要約すると以下のとおりである。奈良時代における法華寺阿弥陀浄土院での浄土庭園造営を寺院庭園の嚆矢として、平安時代前期には庭園を伴う皇族・貴族の郊外別荘の寺院への転換、中後期には浄土庭園あるいは臨地伽藍の成立とその波及があり、さらに平安末期から鎌倉時代にかけての石立僧の活躍も見逃せない。鎌倉時代には庭園を伴う禅宗伽藍形式の確立と境致の思想の定着があり、引き続き南北朝時代にかけては傑出した禅僧であった夢窓疎石の作庭活動が庭園の歴史に大きな位置を占める。室町時代には、足利義満の北山殿（金閣寺）と義政の東山殿（銀閣寺）造営が大きな意味を持つ一方で、禅宗寺院における禅僧の枯山水庭園築造等の作庭活動が目される。そして、寺院と庭園の関係性がすでに十分に深まっていた江戸時代には、京都において宗派を問わない寺院庭園の築造が行われ、その在り方が全国各地へ波及して行くのである。このように、時代ごとに寺院と庭園の関係を深める事象が重ねられてきたことが、寺院という宗教施設が庭園文化の一つの拠点になるという、諸外国には見られない日本独自の在り方を形成したわけである。

続く第Ⅲ章では、宗教観光と庭園観光について整理し、考察を行った。まず、日本では、江戸時代に伊勢参宮や西国

三十三ヶ所観音巡り等において、宗教観光、すなわち宗教的動機を基盤にしつつ景観や食といった他の要素からなる時間と空間も併せて享受する観光形態がすでに成立していたとみなせることを先行研究に基づいて示した。一方、中世以前の庭園観光の事例に関しては、室町時代に李氏朝鮮の外交使節の一員として来日した宋希璟および申叔舟が京都・西芳寺を訪問し、庭園を満喫した記録を残していることを紹介した。そのうえで、それまでの時代に比して寺社参詣等の観光旅行が盛んになった江戸時代において、その主要な観光目的地である京都での主な訪問先は寺社であったもののその実態は参詣に絡めた名所見物の要素がかなり強かったとことを先行研究等から示し、その名所見物の一つの対象として寺院の庭園があったことを『都名所図会』『都林泉名勝図会』の記述や挿図等から推定した。そして、江戸時代の京都で宗教観光と絡めた庭園観光が成立しえた基盤には、歴史的に形成された寺院と庭園との深い関係という日本の特殊な事情があったことを指摘した。

【図版出典】

図1・2・3・4・5・6・8・12・14:筆者撮影

図7 『名宝日本の美術 13 五山と禅院』小学館 1983 から転載

図9・13 秋里籬嶋『都林泉名勝図絵』1799 (柳原書店 1975)

図10 『週刊朝日百科:日本の歴史 16 金閣と銀閣』朝日新聞社 1986 から転載

図11 北村援琴斎『築山庭造伝 (前編)』1735

【註】

- i 井原縁「大名庭園の観光利用状況に関する考察」『観光資源としての庭園2』科学研究費成果刊行物、2018
- ii 兼六園:約 291 万人 (平成 28 年度)、栗林公園:約 71 万人 (平成 28 年度)、岡山後楽園:約 90 万人 (平成 28 年度)、小石川後楽園:約 33 万人 (平成 27 年度)、六義園:約 82 万人 (平成 27 年度) など。
- iii 寺院庭園の拝観者数は公表されておらず不明。ただし、京都市の入込観光者数は、平成 29 年には約 5,362 万人に上り (「平成 29 年京都府観光入込客数等について」<http://www.pref.kyoto.jp/kanko/news/2017/7/documents/kankoirikomikyaku.html>、2018 年 9 月 26 日アクセス)、観光目的地として主要な位置を占めるこれらの寺院の拝観者数は相当な数値となることが考えられる。
- iv 英国とイタリアでは国内各地に優れた庭園が点在するが、これは庭園施主層たりうる王侯貴族や郷紳階級がそれぞれの領地に密着していたことが理由であり、ルネサンス期以降に非中央集権的な政治体制が続いたことと関連すると考えてよい。
- v 白幡洋三郎は後述する『庭 [にわ] を読み解く』のなかで、これを「世俗の庭園」と呼んでいる。
- vi 白幡洋三郎『庭 [にわ] を読み解く』淡交社、2012
- vii 飛鳥時代の庭園を特徴づける意匠としては、方池 (方形の池) をはじめとする幾何学的な輪郭の池、池の護岸はほぼ垂直に積み上げた石積み、精緻な加工を施した噴水などの石造物が挙げられる。
- viii 小野健吉『日本庭園—空間の美の歴史』岩波書店、2009 など。
- ix 林宗甫『和州旧跡幽考』(天和元年 (1681)) に「浄土院 或人の申、法華寺より坤一町ばかり、田中に石あり。かの寺の跡なり。」とある。
- x 「法華寺阿弥陀浄土院跡の調査—第 312 次」『奈良文化財研究所

年報 2000-Ⅲ 奈良文化財研究所、2000

- xi 阿弥陀浄土院の園池にはそれに先立つ下層園池があったことが発掘調査で確認されており、これは不比等邸の園池を引き継いで不比等の妻・縣犬養橘美千代が営んだ「観無量寿堂（仮称）」の園池として用いられたものである可能性が考えられる。（小野健吉「浄土庭園の諸相」『古代庭園の思想』p.133-164、角川書店、2002）
- xii 『類聚国史』巻31「天皇行幸下」天長9年（832）4月11日条に「鸞駕幸_二紫野院_一、御_二釣台_一。・・・、新_二沢院名_一。以為_二雲林亭_一。」とある。釣台の存在から、園池があったことが窺える。
- xiii 『三代実録』貞観5年（863）正月11日条、清原真人瀧雄卒伝
- xiv 『日本三代実録』天安2年（858）10月17日条「陵辺修_二三昧沙弥甘口_一、令_レ住_二雙丘寺_一。元是右大臣清原夏野之山庄、今所謂天安寺也。」
- xv 例えば、『文徳天皇実録』仁寿3年（853）2月14日条、藤原関雄卒伝に、「常在_二東山旧居_一、耽愛_二林泉_一」との記述がある。ここにある「林泉」は庭園のこと。
- xvi 『扶桑略記』後冷泉天皇 康平4年（1061）10月25日条、「平等院者、水石幽奇、風流勝絶。前有_二一葦之渡_一・長河_一。宛如_二導群類於彼岸_一。傍有_二二華之壘_一・層嶺_一、不_レ異_二積_一・諸善_一而為_二山_一。是以改_二賓閣_一・兮為_二仏家_一。廻_二心匠_一・兮構_二精舎_一、爰造_二弥陀如来之像_一、移_二極楽世界之儀_一。礼_二月輪_一以_レ挙_二手者_一、仰_二引接於八十種之光明_一、臨_二露地_一以_レ投歩者、縮_二往詣於十萬億之利土_一。」
- xvii 現存する唯一の例外として、本堂の前面に方池を配する円通寺（雲南省昆明市）があるが、円通寺の創建は元代で、日本の浄土庭園や臨池伽藍よりもかなり時代が下がる。
- xviii 『長秋記』大治5年（1130）5月17日条「・・・、地形優美、眺望無極。就中新瀧水不謂人力。偏是林賢所為也。」、長承2年（1133）9月14日条「女院御覧瀧。乗御舟、又渡御々堂。召得大寺法眼、瀧事可令感之由有仰。仍遣召、其次瀧今五六尺許可上高之由示合、申可安之由。」
- xix 「石立僧」の項。『造園辞典』p.39、岡崎文彬編、養賢堂、1974
- xx 白幡洋三郎「仁和寺」『庭を読み解く』淡交社、2012
- xxi 現存するのは、享保17年（1732）に建長寺の僧が書き写した写図。
- xxii 小野健吉「禅宗伽藍がもたらした「背面庭」」『禅宗寺院と庭園』奈良文化財研究所、2013
- xxiii 『園太暦』貞和3年（1347）2月30日条「庭花盛開。有感有興。花陰立胡床数脚、上皇以下東堂□諸卿侯之、暫握翫。其後御乗船。・・・花下春興不能欲罷。堪事之輩在船、可令奏樂歟。」
- xxiv 梶野俊明『禅と禅芸術としての庭』pp.224-225 毎日新聞社、2008
- xxv 『明月記』嘉禄元年（1225）正月十四日「巳時許中将相共向_二北山_一、見_二勝地景趣_一。礼_二新仏尊容_一。每事以_二今案_一被_二營作_一、毎_レ物珍重、四十五尺瀑布瀧碧、瑠璃池水、又泉石之清澄、実無_二比類_一。」
- xxvi 『蔭涼軒日録』長享元年（1487）8月2日条に「於東山被移西方境界」とある。これは筆者の亀泉集証が東山殿を訪れての記述で、「西方」とは西芳寺のことである。
- xxvii 例えば、西芳寺の指東庵・西来堂・合同船・邀月橋・湘南亭に対応する建物等に、東山殿ではそれぞれ西指庵・東求堂・夜泊船・龍背橋・釣秋亭と命名している。（飛田範夫『庭園の中世史』p.118 吉川弘文館、2006）
- xxviii 飛田範夫『庭園の中世史』pp.108-109 吉川弘文館、2006）
- xxix 小野健吉「永禄八年の京都の庭園の形態と機能—フロイス『日本史』の記述から—」『ランドスケープ研究』68巻5号、日本造園学会、2005
- xxx 飛田範夫『京都の庭園（下）』京都大学出版会、2017
- xxxi 小野健吉「三宝院庭園」『醍醐寺大観 第3巻』岩波書店、

2001

- xxxii R・ブラックウェル（R. Blackwell）が宗教ツーリズムを以下のように定義したことが紹介されている。①自発的で一時的な無給の旅、②宗教的動機、③その他の補助的機能、④目的地は宗教的場所である、⑤目的地への旅は宗教的实践ではない。（山中弘「宗教ツーリズム」『観光学ガイドブック』p.200-203 ナカニシヤ出版、2014）
- xxxiii 中西裕二「5. 巡礼—観光の起源」『観光キーワード』pp.10-11 有斐閣、2011
- xxxiv 山中弘「宗教ツーリズム」『観光学ガイドブック』p.200-203 ナカニシヤ出版、2014
- xxxv 『懷風藻』「正二位左大臣長屋王 於宝宅宴新羅客： 高旻開遠照 遙嶺霏浮烟 有愛金蘭賞 無疲風月筵 桂山余景下 菊裏落霞鮮 莫謂滄波隔 長為壯思篇」
- xxxvi 『老松堂日本行録』宋希璟（村井章介校注）岩波文庫、1987
- xxxvii 大久保あかね「観光史 日本（1）」『観光学の基礎 第1巻』原書房、2009
- xxxviii 鎌田道隆『お伊勢参り』中央公論社（中公新書）、2013
- xxxix 江戸時代の奥羽地方から京都への旅行者の旅日記を詳細に分析した高橋陽一によれば、彼らの多くが訪れた名所旧跡としては禁裏・祇園社・清水寺・大仏殿・六角堂などがあげられるが、訪問の割合が比較的低かった南禅寺や銀閣寺などを含めると、訪問先は多岐にわたっており、そこには旅行者個々の関心や信仰が反映していたことが考えられるという。（高橋陽一『近世旅行史の研究』pp.160-168、清文堂出版、2016）
- xl 小野健吉「『都名所図会』にみる観光資源としての庭園」『観光資源としての庭園（2）』科学研究費成果刊行物、2018
- xli 小野健吉「江戸時代後期の観光資源としての京都の庭園」『観光資源としての庭園（1）』科学研究費成果刊行物、2016
- xlII 司馬江漢『江漢西遊記』天明9年（1789）3月21日条「亦金閣寺寺<ママ>へ行く。十人にて銀二匁出し見物す」。滝沢馬琴『羈旅漫録』享和2年（1802）7月11日条「金閣拝見の者、一人より十人までは銀二匁なり。これを寺僧に投ずれば、即庭の門ひらく。東山銀閣寺もまたかくのごとし」。また、高台寺についても、絶景で知られた傘亭の拝見等に一朱の拝見量が要った、との記述が『筆満可勢』天保6年（1835）条にあるという（宇治市歴史資料館編『幕末・明治京都名所案内：旅のみやげは社寺境内図』2004）。

受理日 2018年11月28日